

## 松尾雅彦氏の急逝に寄せて

松尾雅彦氏が2月12日に急逝された。1月18日に本誌読者の会と農村経営研究会のパーティーで乾杯の音頭を取っていたばかりだった。

改めて言うまでもないが、松尾氏は日本のジャガイモ産業のリーディングカンパニーであるカルビー(株)の代表取締役社長を経て同社相談役であるとともに、同氏のライフワークとも言えるべき特定非営利活動法人「日本で最も美しい村」連合副会長、さらに『スマート・テロワール 農村消滅論からの大転換』を上梓された後には一般社団法人スマート・テロワール協会を立ち上げ、全国各地での講演などを通して農村と地方再建のために文字通り走り回っておられた。また、アメリカにおける大学農学部のエクステンションセンターとしての機能を日本で実現すべく、山形大学に私財を投じて寄附講座を開設し、実践の拠点とされた。その様子は、本誌2017年7月号から連載の「スマート・テロワール通信」でも紹介されている。当社が主催する農村経営研究会にも毎回出席され、アドバイザーとして助言をいただいていた。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

松尾氏の視点は、地方が中央のマーケットに依存せず、地方の中で自給圏を構築して自立していくことが地方の再建と農業の成長のカギになるというものだった。そのために農家だけではなく、地方にある加工業者や小売業者こそが力を発揮すべきだと説いて回った。それは、同氏がポテトチップをはじめとするジャガイモ産業の確立のために北海道を中心とする全国の農家と契約栽培を行ない、その一方でカルビーが商品開発とマーケティングに取り組むことで高い原料でも輸入に対抗してきた経験からの主張だった。そして、過剰な水田を畑地化してトウモロコシなどの飼料作物を含めた輪作を実施し、傾斜のきつい水田地域では積極的に放牧することで畜産のある農業を発展させるべきだと説いて回っておられた。それを一握り、一業種内での勝ち組の「個人戦」ではなく、業種を越えた「団体戦」で実現していくことと呼ばけられた。

本誌1996年8月発行の18号の「同伴者たち」というシリーズに当時カルビーの社長だった松尾氏の記事が掲載されている。そこに同氏の過剰を基調とする現代という時代、

そのなかでの農業と農産物消費、加工・流通、そして外食や小売業への理解が示されている。本誌のネット版「農業ビジネス」でもご覧いただけるのでぜひ再読をお願いしたい。

僕が日本農業を語るときベースとしている「欠乏から過剰への転換」というテーマを国民栄養調査のデータで見ると教えてくださったのも松尾氏だった。農業生産という視点ではなく、消費起点で加工業や新しいマーケティングの視点から一体的に農業を考えるべきだと教えてくれたのも松尾氏だ。そこから僕は「目線(理念)のそろった異質な者のネットワーク」が大事であるという考えでさまざまな業界を越えたセミナーなどをやってきたつもりである。

日本の水田農業に畑作技術体系を定着させることの必要性を教えてくれた故菅野祥孝氏(スガノ農機(株)相談役)に次いで、松尾雅彦氏という僕にとって二人の師を失ってしまった。しかし、いよいよ農村と言わず日本の少子高齢化が進んできたが、これから急激に進む高齢農家の引退や新しいセンスを持った若い農業経営者の登場によって農業農村にも新しい波が起きている。今こそ我々は松尾雅彦氏、そして菅野祥孝氏の思想と活動の意味を再確認すべきではないだろうか。